

# 道徳教育のための異文化間対話 —宗教観に関する自己意識の重要性—

デラコルダ川島 ティンカ

(2021年12月6日受理)

Intercultural Dialogues for Moral Education:  
On Importance of Religious Self-Awareness

Tinka Delakorda Kawashima

**Abstract:** A few years ago, moral education was made compulsory in public elementary and high schools in Japan. That created a problem because teachers can now highly influence students' values and beliefs through their teaching. To address this issue, I developed a practical discussion-based activity for pre-service teachers about various everyday practices and beliefs related to religion and spirituality. The study showed that through the activity, the students realized their perspectives on values, ethics, and religion. The pre-service teachers with such a raised awareness will be more able to recognize and accept other people's socio-cultural differences and teach in a more objective way.

**Key words:** moral education, teacher training, intercultural understanding, religious self-awareness, teachers' objectivity

## 1. はじめに

外国にルーツを持ち、日本語の指導が必要な小学校から高校生の生徒・児童は 43,947 人とされる(齋藤ほか 2018)。近年および今後の外国人労働者の増加にともなう、この数字はさらに大きくなると予想されている。広島大学が所在する東広島市においても、2019年の段階で、7,415名の外国人が生活している。国籍数は90以上であり、多様な文化が存在する状況である。家族を同伴して来日する場合もあり、ある小学校では30から70名の児童が入学・転入するような状況が起こっている。このため、日本語指導を要する児童の担当経験のない教員も、彼らを指導することとなっている。言葉の問題だけでなく、多様な文化を持つ児童への対応、家庭環境の理解には、他文化への理解が重要となる。しかしながら、ほぼ全ての教員がこのような教育を受けておらず、自らの経験を頼りに対応しているのが現状である。全ての小学校でこのような事態が起こっているわけではないが、教科としての道徳教育がはじまっていること、外国人労働者の増加が予想されていること

を考慮すると、大学における教員養成の段階において、異文化・多文化理解の(教員候補者への)教育をおこなっておくことが必要だろう。特に、文化は宗教や信仰と結びついていることが多く、そのため、倫理観や行動様式が異なっており、道徳教育においても各児童・生徒の文化を慎重に扱う必要がある。

筆者は、すでに広島大学教育学部におけるアンケート・ディスカッションにもとづく、学生の宗教観に関する自己意識を調査した(Delakorda Kawashima 2019)。その後もこの試みを継続しており、得られた成果を加えてさらに考察を深めたい。本論では、広島大学教育学部におけるアンケートをもとに、各学生の宗教観・信仰的行動を確認した。その結果からさらに、小人数グループでディスカッションをおこない、学生の他者意識にどのような変化が起こるかを観察した。本発表では、この手法にもとづき、他者(「日本文化」も含む)を理解し受け入れる準備をする授業モデルの有効性を検討する。

## 2. 公教育における宗教教育をめぐる議論

日本の学校における国際化の進展とともに、国際理解・他文化理解のために宗教教育が必要ではないかという問題提起が宗教学者らによってなされた(井上 2011)。その一方で、宗教教育は愛国主義を強めるおそれがあるという懸念も指摘されている(Fujiwara 2007)。道徳教育が必修化されて以降、倫理に関する教育は宗教に関する教育よりも懸念が少ないように思われるが、基本的に教員の倫理観・道徳観によって学習や評価が行われる以上、それが児童・生徒に与える教育上の影響は大きいといえる。公教育なので、客観性のある授業がおこなわれるべきであるが、その保証はない。

## 3. 宗教観の客観化の一方法

発表者は、教員が授業をおこなうのであるから、少なくとも、教員は授業の根幹となる自身の宗教観・信仰心・倫理観をある程度客観化しておく必要があると考える。それは、一人でおこなうものではなく、他者とのディスカッションによって客観性が高まると考えられる。自身の宗教観を客観化するには、自分の社会的属性・行動様式などを確認することが必要である。同じ日本文化に所属していても、複数の宗教があり、多様な地域文化が存在する。大学では様々な地域から学生が集まっており、そうした違いを見つけることが容易である。

発表者がおこなったアンケートの設問は、石井(2007)から抜粋し、現在の多様な信仰の状況に合わせて修正を加えたものである。また、10分程度で回答できるように短く作ってある。今回の対象者は、教育学部3年生の男女144名であった。神道・仏教・キリスト教・イスラム教などの信者かどうか、それらの文化に対するイメージ、どんな宗教的行事に参加するか、教会・寺社に参詣するか、身近に信仰心の篤い人がいるかなど、を質問項目としている。次に、これらの回答結果は、引用元のアンケート結果と比較できるため、まずは全体との比較をおこなった。最後に、4人程度のグループに分かれ、各自の回答結果を比べてディスカッションをおこなう。最後に短い感想・コメントを書いてもらったが、グループ・メンバーとの文化・信仰・宗教観の違いに気づくものが多かった。アンケートだけでも、自分の宗教観などを整理することに役立つことがわかった。さらに、他者と話し合うことによって、他者との相違点に

気がつくことが容易となることが明確となった。

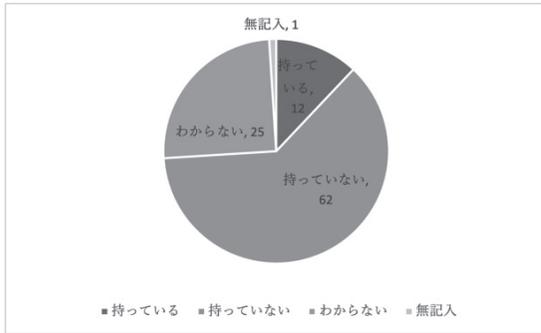
第1図は、特定の信仰を持っているか、または、スピリチュアルなものを信じているか、という質問の結果である。半分以上の学生が信仰がないと回答している。この一方で、第2図によると、特に女子学生が占いや祈願などを熱心におこなっていることがわかる。第3図は、複数回答可ではあるが、様々なスピリチュアルなものが信じられていることがわかる。ここでも、女性の方がパワースポット、お札などの効力を信じている割合が多いと考えられる。第4図も複数回答可ではあるが、霊能者の存在などに特に回答が集まっている。これらの回答に反して、こうした現象などを信じることを、信仰であると自ら認識する学生は少ない。おそらく学生に限らず、アンケートにある行動や思考は習慣・文化などのように認識されていると考えられ、周囲の人々と同じような行動をとっているからという現状によって支えられているものと思われる。

しかし、このような同一の文化に属する集団内においても、ディスカッションを通じて差異を確認することができる。差異だけでなく、そもそも自分が信仰心を持つとか、何かスピリチュアルなものを信じているという事実、アンケート・ディスカッション以前に気づかない学生がいることは注目されるべきである。

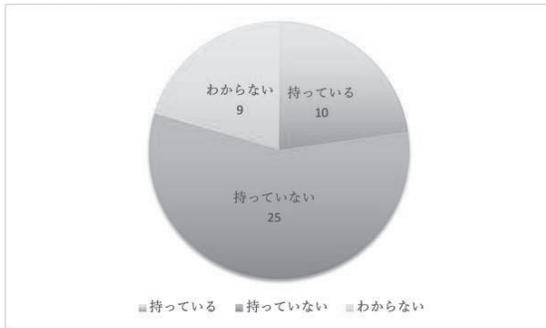
今回の調査調査手法で明らかになったことは、主に、次の3点に絞ることができる。

### 1) 学生の宗教的意識とは何か?

アンケート調査を通じ、学生の宗教知識の少なさが指摘できる(図1)。彼らは、特定の信仰を持たないとしつつも、ほぼ全員が宗教的といえるスピリチュアルな存在や現象を信じていたりする(図2, 図3, 図4)。コメントをみると、これまで日本の宗教というものを考えたこともないという回答が比較的多い。したがって、学生たちは、自分たちの判断の根拠を明確化できていないと考えられる。

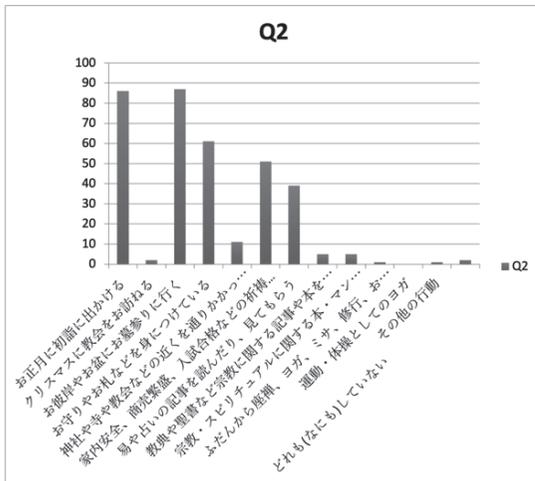


女性

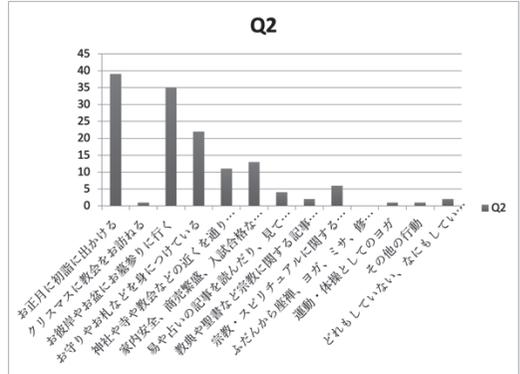


男性

図1 何か信仰とか信心を持っている（またはスピリチュアルなものを信じている）か。

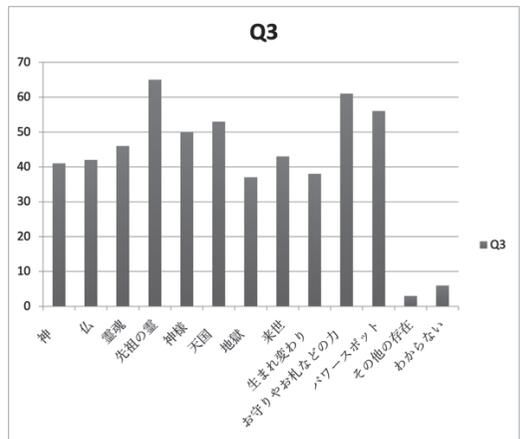


女性

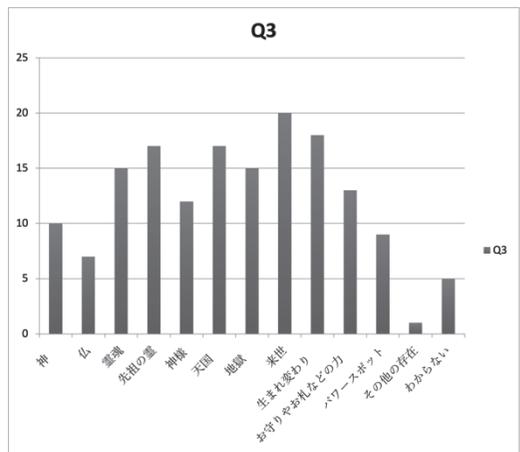


男性

図2 あなたが行なっているもの、幾つでもあげてください。

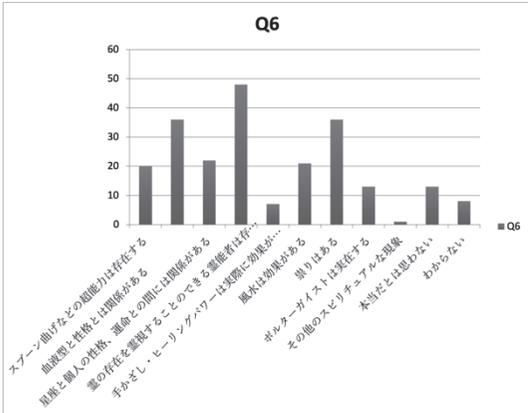


女性

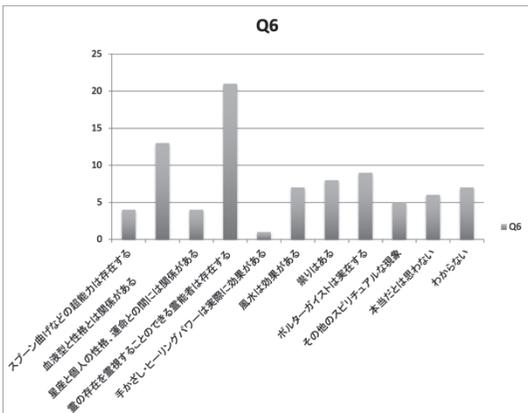


男性

図3 存在すると思うか。幾つでもあげてください。



女性



男性

図4 本当だと思うか。いくつでもあげてください。

2) アンケート調査におけるディベートの意味は何か？

ディベートは、回答者の信仰・宗教観やそれについての意見を表現する機会となる。コメント欄には、今回初めて自分の宗教や信仰について他者と話したという感想が多くみられた。この結果をみると、アンケートおよびディベートは、各自の宗教に関する知識を整理し、意識できるようになるとともに、他者の信仰などについて個人レベルで比較することができるという点で非常に役に立つことがわかった。

3) 学生は異なる信仰（文化）を認識し、それを受け入れることができたか？

学生たちは少人数グループで自発的に議論を進めた。いくつかのコメントを引用すると、「他のグループメンバーは信仰について異なる考えを持っていた」、「他のグループメンバーは信仰についてあまり知らなかった」、「他のグループメンバーは日常的にスピリチュアルなことに気をつけていた」「全員が仏壇が実家にあるわけでないと思った」などが挙げられる。いくつかの宗教的行為は日本で普通であるとしていたコメントもあったが、半数以上の学生はグループ内での比較によって、宗教に関して自分と異なる経験・知識に接したことに驚いていた。

#### 4. 道徳教育を軸とした異文化理解に向けて

アンケート調査自体は、ディスカッションの下準備に過ぎない。できるだけ多くの他者との相違点を見つけられるように準備をする必要がある。今回、試行的に調査をおこなったが、学生たちのほとんどが自分たちの宗教観を認識できるようになったことがわかった。卒業後の人生経験により、宗教に関する認識・知識は増えていくと思われるが、少なくとも、「自分が普通」ではないことを認識しておくことは重要であると考えられる。

多様な価値観を認識できる道徳・倫理教育は、平和な社会を築くために必要不可欠である。児童/生徒/学生が異なる価値観を認識し受け入れられるよう、教員はどのように支援すべきであろうか。ヨーロッパ各国で宗教教育に携わる研究者・教員は、教室内での対話のほか、児童/生徒/学生自発的に学べるような自己調整学習を重視している (Ipgrave 2003, Jackson 2004 ; 2012, Leganger-Krogstad 2003, Weisse 2003)。

今回発表者が試みたアプローチの結果、宗教に関する調査・ディスカッションによって、各自の宗教観の意識化に繋がるだけでなく、他者の価値観をも意識できるようになることが明らかとなった。教員養成課程において、このような宗教社会学的研究にもとづく自己反省的方法は、各自の民族的/文化的ルーツ・信仰・価値観など意識化することに役立ち、他文化理解能力を獲得するための一つのステップとして宗教の多様性を理解する際の手段となるだろう。

謝辞

本論は、日本道徳教育学会第 94 回 (令和元年

度秋季) 大会で発表した内容に基づいている。発表の機会を与えてくださった鈴木由美子先生に深く感謝いたします。また、調査に際しては鈴木由美子先生・宮里智恵先生に、授業中に機会をいただきました。本研究は JSPS 科研費 20K14003 の助成による成果の一部です。未筆ながら、記して感謝申し上げます。

#### 引用文献

- Delakorda Kawashima, T. (2019). Teachers and Ethics: Developing religious self-awareness. *Bulletin of the Graduate School of Education, Hiroshima University. Part 1, Learning and curriculum development* (68), 91-97.
- Fujiwara, S. (2007). Problems of teaching about religion in Japan: another textbook controversy against peace? *British Journal of Religious Education* Vol. 29 (1).
- 井上順孝 (2011). グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム(<特集>宗教の教育と伝承) 『宗教研究』 85(2), 347-373.
- Ipgrave, J. (2003). Dialogue, citizenship, and religious education, In: Robert Jackson (ed.) *International Perspectives on Citizenship, Education and Religious Diversity* (London, RoutledgeFalmer), 147-68.
- 石井 研士 .(2007). 『データブック現代日本人の宗教』増補改訂版.
- Jackson, R. (2004). *Rethinking Religious Education and Plurality: Issues in Diversity and Pedagogy* (London, RoutledgeFalmer).
- Jackson, R. (2012). 'European Developments,' in P. Barnes (ed.), *Debates in Religious Education*, Oxford: Routledge.
- Leganger-Krogstad, H. (2003). Dialogue among young citizens in a pluralistic religious education classroom, in R. Jackson (ed.) *International Perspectives on Citizenship, Education and Religious Diversity* (London, RoutledgeFalmer), 169-90.
- 齋藤ひろみ, 浜田麻里, 金田智子, 菅原雅枝, 伊東祐郎 (編) (2018). 『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業—報告書—』 日本語教育学会.
- Weisse, W. (2003). Difference without discrimination: Religious education as a field of learning for social understanding, in: R. Jackson(ed.) *International Perspectives on Citizenship, Education and Religious Diversity* (London, RoutledgeFalmer), 191-208.